

講演会・シンポジウム

親鸞聖人

ことばの織りなす力

はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所では、2019（令和元）年9月4日（水）、龍谷大学響都ホールにて、講演会・シンポジウム「親鸞聖人 ことばの織りなす力」を開催いたしました。

宗門では、1982（昭和57）年より第2期宗門発展計画を起点として「浄土真宗聖典」の編纂事業を推進しており、これまでに、『浄土真宗聖典（原典版・原典版七祖篇・註釈版・註釈版七祖篇・註釈版第二版・現代語版）』を刊行しています。そして、2011（平成23）年の親鸞聖人70回大遠忌法要を機縁として、『浄土真宗聖典全書』の編纂を進めてまいりましたが、

2019（平成31）年3月、第6巻「補遺篇」の刊行をもって全6巻が完結しました。

『浄土真宗聖典全書』は、これまで宗門内で編纂されてきた聖典の精神を受け継ぎつつ、最新の学界の動向に注視し、善本として高い評価を受けている史資料を翻刻した、「浄土真宗聖典」の集大成です。今後は、本聖典によって親鸞聖人のみ教えが研鑽され、伝道が進められていくことが期待されます。

そこで、宗門総合振興計画の事業として、「仏教界の英知の結集」といえる『浄土真宗聖典全書』全6巻の完結を記念して、真宗各派や関係学校の有識者をお招きし、講演会・シンポジウムを開催いたしました。講演会・シンポジウムは、以下の流れで行われました。

一、開会挨拶

丘山 願海（総合研究所長）

二、記念講演「礎としての聖教

——聖典英訳を通して学んだこと——

徳永 一道（本願寺派勧学寮頭）

三、記念講演「親鸞聖人の漢文訓読」

佐々木 勇（広島大学大学院教授）

四、「浄土真宗聖典全書」の魅力」

田中 真（総合研究所上級研究員）

五、シンポジウム『聖典全書』の完結を承けて

——聖典の編纂と普及——

パネリスト…三木彰円（大谷大学教授）

栗原 廣海（高田短期大学学長）

進行 役…満井秀城（総合研究所副所長）

今回は、前半（開会挨拶／記念講演）の内容をご報告いたします（後半は次号にて）報告いたします。

一、開会挨拶

開会にあたって、丘山願海（総合研究所長）より挨拶いたしました。

【挨拶（丘山所長）】

本日は、「親鸞聖人 ことばの織りなす力」というテーマで講演会・シンポジウムを開催いたします。2019（平成31）年3月に『浄土真宗聖典全書』（以下『聖典全書』）第6巻「補遺篇」が刊行され、これで全6巻が完成いたしました。

最初に刊行されたのは第2巻「宗祖篇上」で、2011（平成23）年3月の刊行です。10年くらいにわたって編纂してきたわけですが、そのためにはさまざまな事前準備が必要でした。刊行の5～6年前から準備してきましたので、おおよそ15年以上かけてようやく完成したことになります。その記念行事として、今回の講演会・シンポジウムを開催させていただく運びとなりました。

「浄土真宗聖典」の大枠は、配布冊子（図1）を見ていただければ、私も浄土真宗本願寺派総合研究所が行っている基本的な文献研究、編纂事業のあり方がご理解いただけるかと思えます。

また、本日記念講演でお越しいただきました徳永一道先生からお話があると思いますが、本願寺国際センターでは、英文浄土真宗聖典の翻訳事業がございます。これも宗門で長い時間をかけて行っております。『聖典全書』、「現代語版聖典」などの編纂の他、英訳やその他の言語の聖典も企画されています。

皆さまが持ち前の聖典は、『註釈版第二版』や『現代語版聖典』かもしれませんが、今回完結した『聖典全書』全6巻は基本中の基本でございます。

基本中の基本とさえ、親鸞聖人は、ご自身で筆をとられた真蹟しんせきが、他の宗派の祖師方よりもかなり多いと思えます。それが『親鸞聖人真蹟集成』という形で出版されたりしてきました。大変な量のものですが、今回は『聖典全書』という形で浄土真宗の聖典を完成させていただきました。『聖典全書』そのものを直接にご覧になったことがない方もいるかもしれませんが、全てのものはこの『聖典全書』から始まると思っております。

私どもは今、釈尊しゃくそんのことばを現代語訳で読む機会がありません。それは、そもそも100年以上前にパリー聖典協会ができ、そこでパリー語の原典の翻訳が始まりました。日本の研究者がイ

ギリスに留学して学んで帰ってくる。そこで作られたものは今でも世界的に使われていて、それがあってこそ、色々な先生方が釈尊のことばの現代語訳を現在も出版されているわけです。

そういう意味では、いかにして良い原典を作るかが最大の課題となります。専門家にとって有用であるというだけでなく、あらゆることの基本中の基本となるものが必要なのです。もと

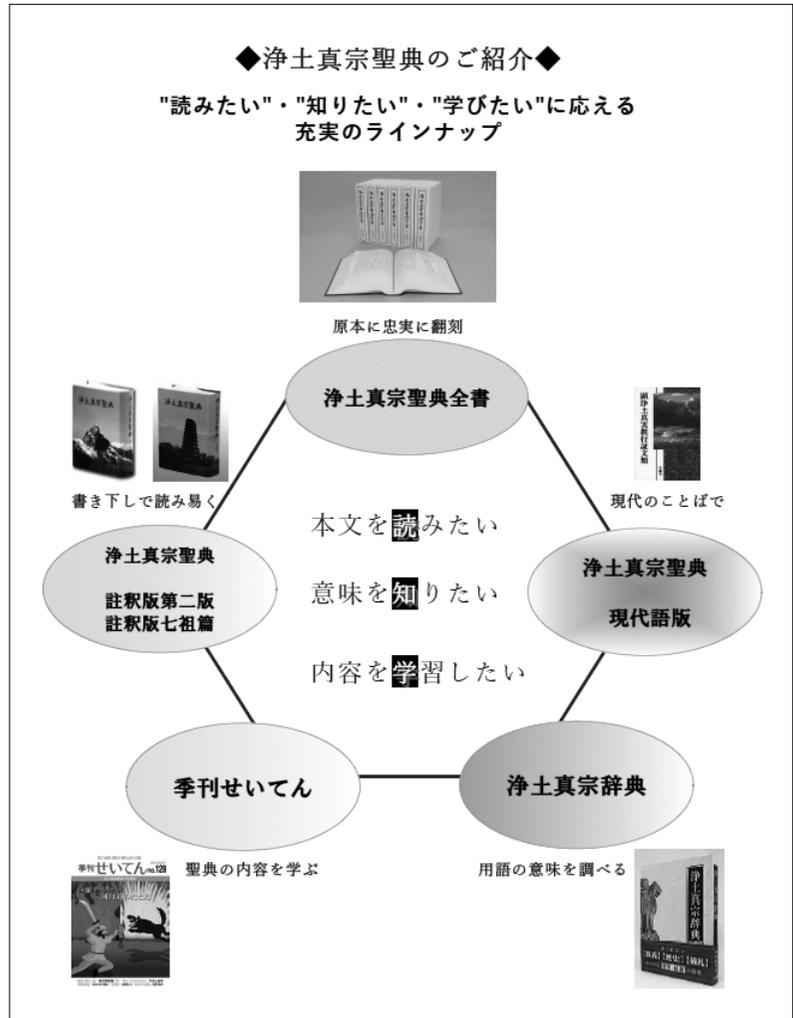


図1 浄土真宗聖典のご紹介

ことばは素晴らしいな」と、原典そのもの、あるいは現代語訳からそういうことばを見つけていただきたいと願っております。

今日は前半と後半で4名の先生にお話を頂戴いたします。それでは、先生方、よろしくお願いたします。

もとの聖典とはどういうものなのか、あるいはそういうものを現代語に訳すことの大事さ、そしてそこから学べること。そういう観点から、今日は先生方から色々なお話をさせていただけると思います。

私から皆さまへのお願いです。私は仏教をはじめ、さまざまな宗教を学んだり、あるいは親鸞聖人のみ教えも学んできましたが、解説書はいくら読んでも解説書でしかない。解説書で感動することはあまりないと思っています。やはり、原典そのもの、あるいは訓読したもの、現代語訳されたものを、ぜひ直接ご覧になって、自分自身の宝物を探すようなつもりでお読みになって、そういう中から「ああ、この

二、記念講演「礎としての聖教―聖典英訳から学んだこと―」

徳永一道先生（本願寺派勸学寮頭）は、本願寺国際センターで長年、浄土真宗聖典の翻訳（英訳）に携わってこられました。その聖典英訳の取り組みを振り返りつつ、聖教を英訳するときの困難さについて、具体例を交えてご紹介いただきます。以下、徳永先生のご講演の内容を要約したものを掲載します。

【徳永先生記念講演の概要】

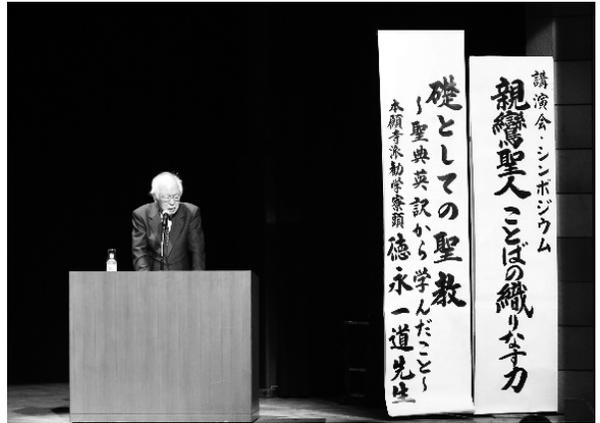
①本願寺の聖典英訳事業

本願寺国際センターでは、親鸞聖人のみ教えを世界に伝えるため、英語を中心として浄土真宗聖典の翻訳作業を続けています。1978（昭和53）年に正式に始まり、同年の Letters of Shinran（英訳『未灯鈔』）を皮切りに宗祖の著作が翻訳された。1997（平成9）年には The Collected Works of Shinran（英訳親鸞聖人著作集）を刊行、2000（平成12）年の Letters of Rennyo（英訳『御文章』）、2003（平成15）年・2009（平成21）年の The Three Pure Land Sutras（英訳浄土三部経）を経て、2012（平成24）年以降は The Pure Land Writings（七高僧著作）の翻訳を行っており、現在は道綽禪師『安楽集』の英訳作業中である。

②ものの見方の違い

お聖教を英訳するのは、縦に書いたものを横に直せばいい、といったものではない。翻訳に関して一番大事なことは、もの考え方が違う、言い換えれば世界のとらえ方が違うことである。それが根本的に異なるから、ことばを置き換えたところで、その違いが出るわけではない。「ありがとう」という英語はない。「ありがとう」は “Thank you.” ではない。“Thank you.” は「私はあなたに感謝します」という意味である。「ありがとう」は、漢字で書くと「有ることが難しい」と書く。あなたのご親切はありがたい、滅多にない。あなたが私にしてくださったようなご親切は、その辺に転がっているようなものではない。滅多にないほど貴重なものだ、というので感謝の意味になる。簡単な日常語でも根本的な違いがある。まして、仏典を英訳することは不可能と言えるぐらい難しい。

「向こうに山が見える」という日本語は、英語には絶対できない。「I see the mountain in the distance.」は全く違う。英語ではどうしても “I” が入って「私は向こうの山を見ている」という意味になる。しかし、「向こうに山が見える」の主語は「山」である。山が先にある、それが私の眼に移っていると、いう状況を、この日本語は表現している。日本語では「私」が出てこない。こういうところから「他力」が出てくる。これを前提としないと、親鸞聖人の救いの理念というものはわからない。「私」が先に立てば、「他力」は成立しない。阿弥陀さまは



【講師紹介】徳永一道（本願寺派勸学寮頭）

1941年生まれ。本願寺派宗学院院長、京都女子大学名誉教授。専門は真宗学。浄土真宗の現代的課題について多く提言するとともに、浄土真宗聖典の英訳に長年携わる。主著は『浄土文類聚鈔講讀』（永田文昌堂、2004年）、『親鸞聖人 その教えと生涯に学ぶ』（本願寺出版社、2009年、共著）など。

隠れてしまう。

もともと主語がないのに、主語を入れなければ英語にならない。ここが英訳で最も難しい問題である。日本人の発想の仕方と、西洋の発想の仕方の、決定的な違いと言ってもいい。従って、主語のないことばを、なんとか辻褄を合わせて主語のあることばに翻訳しても、どうしても矛盾が生じる。これは、自己否定の文化と自己主張の文化の違いである。

③そのままの救い

「如実知見」ということばがある。鈴木大拙先生や長尾雅人

先生は、仏教を一言で言うと「如実知見」とおっしゃっていた。ものがあるがままに見る、ものがあるがままのところにあるが、究極的なものがある、ということである。なにか特殊なところ、現実をかけ離れたところにあるわけではない。ものがあるがままが真実である。これは仏教に一貫したものの見方である。「向こうに山が見える」という事実そのものが究極的な事実であって、「私」を付け加える必要はない。何を付け加えることも、何を差し引くこともない。仏教の究極的な真理はそういうところに成立する。親鸞聖人の救いも同じである。「そのままの救い」、それが浄土真宗のご法義の中心である。阿弥陀さまは「そのままがいい」「そのまま来なさい」とおっしゃる。これが南無阿弥陀仏のすがたである。私はこのままでいい。何も付け加える必要はない。これが浄土真宗の救いである。

西洋的な発想とは根本的な違いがある。聖典を英語に翻訳するのは至難の業であるが、そうした翻訳作業を通して、親鸞聖人のみ教えはそのままの救いであることを聞かせていただいた。

三、記念講演「親鸞聖人の漢文訓読」

佐々木勇先生（広島大学大学院教授）は、同時代の各派宗祖の資料と比べても抜きん出た数が伝存している親鸞聖人ご自身の資料を、国語学・訓点語学の視点から解き明かされています。本会では、親鸞聖人の漢文訓読の方法や歴史的位置づけについてご講演いただきました。以下、佐々木先生のご講演の内容を要約したものを掲載します。

【佐々木先生記念講演の概要】

①浄土真宗聖典の特徴

浄土真宗聖典の特徴は、1つは宗祖親鸞聖人自筆本が大量に伝わること、もう1つは親鸞聖人自ら、読みを加点していることである。我々は、親鸞聖人のことばを直接に聞くことができる。

②漢文訓読の前提

親鸞聖人の漢文訓読はいかなるものであったのか。その前提として、3点をおさえておく。

第1に、「物語のことば」（『源氏物語』など）と「訓読のことば」（仏書）は違う。親鸞聖人の『教行信証』の用例を見ると、「訓読のことば」を多く用いられていた。

第2に、「訓読のことば」にも変遷がある。小林芳規先生は

『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会、1967年）を書き、九十歳となった現在も『平安時代の佛書に基づく漢文訓読史の研究』（汲古書院、2011年）を出版されているが、「訓読のことば」は時代と共に単純化・簡略化を遂げたことを明らかにされている。

第3に、同時代の訓読のことばは一つではない。同じ時代であっても、漢籍と仏書の訓読には相違があり、藤原家・菅原家などの家や、仏教の宗派・流派によってそれぞれ読み方の歴史がある。

③親鸞聖人の漢文訓読法

親鸞聖人は漢籍も引用するので、漢籍の訓読を交えた仏書の訓読をしている。その中で親鸞聖人は、単純化や簡略化という訓読史上の変化を先取りしており、さらに漢字の音を表す声点（文字の四隅に付した記号で、清濁を表すこともある）については、若き日に修学に励まれた天台宗から起こった濁声点を使いながら、清濁を非常に良く区別している。

親鸞聖人の漢文訓読法は、単純化という時代の流れを先取りしつつ、清濁を徹底して区別していたことが特徴である。なぜこのようなことを行ったのか。それは、わかりやすさ・読み上げやすさという読者への配慮を起因としている。親鸞聖人はだれもが読めることを意識していた。



【講師紹介】佐々木勇（広島大学大学院教授）

1961年生まれ。比治山女子短期大学助教授等を経て現職。博士（文学）。専門は国語学（訓点語学）。親鸞聖人の真蹟等を対象資料とした、漢字音や仮名遣いなどに関する論考や講演が多数ある。主著は『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院、2009年）、『専修寺蔵『選擇本願念佛集』延書 影印・翻刻と総索引』（笠間書院、2011年）など。

④親鸞聖人のごとば

親鸞聖人は、漢文の訓読に際し、独自の経文解釈を書き込んでいる。例えば「至心回向」に「セシメタマヘリ」「シタマヘリ」と徹底して仏の側で訓読・書写している。なぜこのような解釈をしたか。この「阿弥陀さまが回向する」という解釈はどこから来たのであるうか。師匠である法然聖人は自筆本がほとんど残っておらず、「至心回向」の訓読法は不明である。龍谷大学蔵『黒谷上人語灯録』元亨版には「回向し給ふ」と読む箇所もあるが、「至心回向」「回向発願心」の部分は「回向して」と読んでいる。親鸞聖人の「至心回向セシメタマヘリ」

は、親鸞聖人の考えを表現したものである。

我々は親鸞聖人のごとばを直に知ることができる。これは世界の宗教や日本仏教の諸宗の中でも希有なことである。

『浄土真宗聖典全書』は親鸞聖人のごとばをそのまま後世に伝えるものである。

~~~~~

今回は、四、『浄土真宗聖典全書』の魅力」と五、「シンポジウム『聖典全書』の完結を承けて——聖典の編纂と普及——」の内容をご報告いたします。

（総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉）